

時間切れ3分前の逆転劇

スパイダー・ アイランドの秋 最終章

マディーヌ湖（フランス）のある小島を、
私たちはスパイダー・アイランドと名付けた。
秋、その小島に計4回、延べ20日間にわたって釣行した。
2度目の旅で嵐のなか24kgを釣るが、
嵐は去り、私は場所移動を決断する。
今回は2度目の釣行の終盤戦、
場所移動後のシーンからレポートを再開しよう。

マックス・ノラート（ドイツ）=レポート
Reported by Max Nollert

山本和由 = 翻訳
Translated by Kazuyoshi Yamamoto

MY AUTUMN PART 2

食料不安

2度目の釣行も終わりに近づくと、充分用意してきたつもりだった食料が底をつきはじめた。コイのエサはたっぷり用意してあるが、自分の食べ物は計算しておかないとまずいことになる。サオをだしてから食料を日数分に分けた。

移動した釣り場は底も湖岸も泥だった。どんな仕掛けを使ってどう釣るかに頭を悩ませながらも、私はそれほど悪い状況ではないと判断していた。

チャンスはあるだろう。私はアラームに集中していた。

午後、居眠りする私をスピンフィッシャーアラームの音がたたき起こした。

寝ぼけまなこでのやり取りながら、すべてがうまく運んで、ミチイトを切られることもなかった。

私は新たな仕掛けを余分に作り、ボートに乗って夕暮れの湖上に出た。波は穏やかでボートは快適に水面を滑っていった。

心に引っかかるのは、ハリ先がカーブしたハリ

を持ってこなかったことだ。このときだけは、自分の夕食の心配より、ハリを忘れたことを悔やんだ。

湖の対岸では、トーマス・ブレイゼックたち5人が5日前からサオをだしており、すでに21kgのコイを釣ったらしい。

しばらくすると、彼らが私の釣り場に移動してき

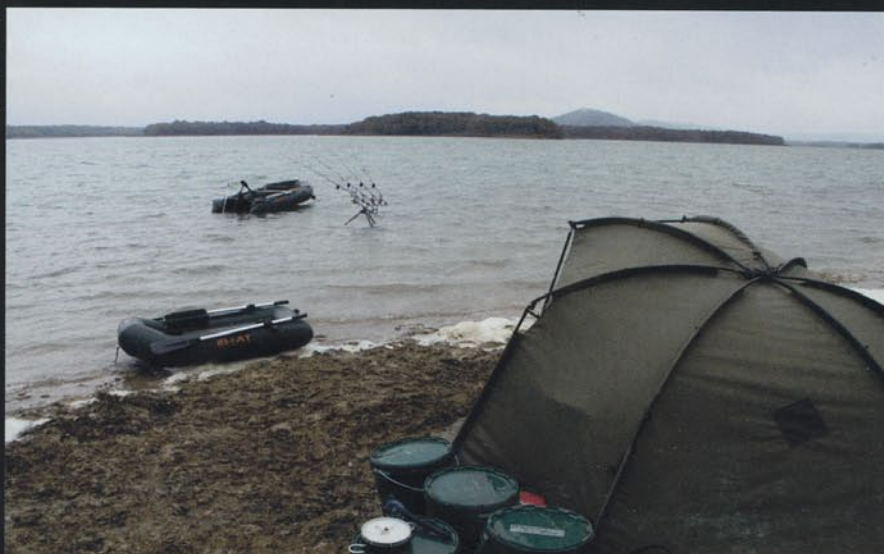
た。

トーマスは7回のアタリをもらったが、残念ながらすべてバラしたようだ。

ヤルダのほうは、運よく25kgを超える大型を釣りあげていた。

私たちは、この難しい湖の攻略法について、

本来なら石のフィールドが、いまは泥に変わっていた。しかし、作戦は間違っていないはずだった



スパイダー・アイランドの秋

最終章



2度目の釣行で釣り場を移動した後、最初のアタリは17.5kgのカガミゴイだった

お互いの意見をぶつけ合った。「湖がイガイで埋め尽くされていることが一番の問題だ」みんなの結論は一致した。

西風の1日

その夜2~3時間眠った後、午前4時に初めてのアタリがあって、17.5kgのカガミゴイを取り込んだ。私は大満足だった。その後は9時半まで静かに時は過ぎた。再び魚の訪問を受けたのは一発目と同じサオだった。2~3回アラームが鳴り、間もなく大きなアタリがあってミチイトが勢いよく滑り出ていく。私はすぐボートに飛び移ってサオを立て、魚の重さをはかりと受け止めた。腕に伝わるすごい重さ。私は興奮で脈が速くなるのを感じた。少しずつ魚に近づいているが油断は禁物だ。

魚まであと50mという所まで来た。ヤツはエサを食った場所からほとんど動かずに猛烈な抵抗を続けている。この日の日中は強い西風がずっと吹き続けていた。猛烈な風に逆らってボートを進めるので、すごく体力を消耗する。あと20mというとき、私はどうも変だと感じはじめた。誰かがギターを弾いているような感触なのだ。何かミチイトをピンピンとはじいている。魚は障害物の周囲を旋回しているようだ。シヨックリーダーがようやくガイドを通り抜けはじめた。魚は依然として深みから動こうとしない。突如、イトの張りがなくなった。私はリールを巻くスピードをだんだん速くしたが、サオに重さが全く伝わってこない。あと2~3mで仕掛けが見える位置まで巻くと、その先が消えてなくなっていた。0.6mmのリーダーは無残な切れ方をしていて。全身の力が抜けていくのを感じる。



左/鳥への移動とやり取りはバッテリーにとっても大きな挑戦であった。しかし、全く問題はなかった 右/この湖で釣りをするうえで大きな難題となるのが、淡水イガイである

私は自分に問いかけた。「何が起こったのか。コイが飛び込んだカカリの正体は何だろう」

狂い続ける計算

ひと晩中、バラシた理由を考えていた。アタリがあったのに取り込めなかったことが、悔しくて仕方なかったのだ。考え抜いた末、私はある作戦を思いついた。サオはこれまでと同じく4本だすことにしよう。左の2本のサオに当たった場合は、ボートを使わないでやり取りすることに決めたのだ。仕掛けの投入点は障害物から30m離れた所だった。素早く合わせた後、ウエーダーを履いて立ち込んで魚に接近していく。そして一刻も早く、ハリ掛かりした魚を私のほうへ寄せるのだ。一方、右の2本のサオにアタリがあったときは、スプールを完全にフリーにしてイトを送り出してやる。ボートに飛び乗り、イトをたるませたまま、エレキを使って全速力でハリ掛かりした魚の所に向かう、というのが私の計画だった。やり取りは魚の真上に到着してから始めるのである。アタリがきたのは午前3時。そのとき湖は大荒れだった。左の2本のサオは障害物から離れた場所に打ち込んであった。アラームを鳴らしたのはそのうちの1本だ。

私はウエーダーを着用して水に入ると全力で歩き、ベストポジションに立った。魚はすでに10mほど私のほうに寄ってきている。安全と思われる場所まで来ていた。もう少し自分が近づいたほうがいだろう。

私は、やはりボートは必要ないと思った。計画どおりに進めば、間もなく私は大ゴイを手にするはずだ。

魚は強く抵抗した後、ようやく私の正面やや右の水面に姿を現した。

瞬間、ガクッときた。

「うそだろ!」

なんとコイではない。私の目の前に浮いたのはナマズではないか。なんとという不幸か。私は絶望のどん底に転落していった。

いったい、どういうことだ。姿を見るまでコイだと信じていたのに…。

ナマズは130~140cmはありそうなものだったが、その顔を見たくもなかった私は、即座に水中に追いついた。一刻も早く立ち去ってほしかったのだ。

「さっさと俺の前から消えてくれ!」

午前4時、失望だけを背負ってサオを置いた場所から戻った私は、ベッドチェアの上に横たわった。まるでぼろ雑巾だった。

しばらくの間、サオにも変化はなかった。

午後になり、4本のサオの内2本を、私のいる場所の背中側に移動した。つまり、岬の反対側の岸だ。

まあ慌てても仕方ない。私にできるのは待つことだけ。アタリがいつやってくるかなんて、読むことなどできないのだ。

私は暗くなる前に帰り支度を始め、荷物を車に積み込んでおきたかった。

そう考えると、残された時間は少ない。体も疲れ果てていたし、食料も底を突いていた。

最悪といってよい結末

荷造りをしていると突然、ピーツというアラームが響いた。左のサオだった。

私は小さく合わせた後、リールをフリーにして、ボートで魚がハリ掛かりした場所に向かった。計画どおりにいけば、たるんだミチイトが水面に漂っているはずだ。

魚の近くに着くと、私は魚に力を加え、寄せにかかった。

取り込んだのがびっくりするほど小さなコイだった。お世辞にも美しいといえない魚だ。こんな魚が食うようでは、ねらい方が間違っているのだろう。荷物を積み込む前に、私は今回の釣りを反省してみた。

もし私が本を書くとしたら、「私が釣れない1000の理由」とか「最悪の結末を迎えた釣行記100選」とか、そんなタイトルにしよう。そのうちの1冊くらいはベストセラーになるだろう。

トシュテンが気を遣って、ドリンクを私に差し出

この魚を見た瞬間、家に帰れというサインと判断した。私は疲れ果ててしまった



した。グイッと一気におおると、心地よくのどの奥に流れていった。

Trip-3 ステファンと共に

3度目の釣行旅行は、10月25~30日の6日間に及ぶ日程だった。天候がよからうが悪からうが関係ない。私はただ釣りに行きたかった。

残念ながら今回も、レネと最初に釣りに来たときと同じく、天候には恵まれなかった。風はほとんど吹かず、日差しは強かった。とても本来の秋の気候とはいえなかった。

釣りを開始した直後は、まだわずかながら風があったが、その後は微風が時々、思い出したように湖面をなでただけだった。

2日目の夕方、ステファン・イスタスがやってきて、一緒にサオをだすことになった。

その夜アタリがあったが、ハリ掛かりが悪く、やり取り中に逃げられてしまった。「最高のスタート」と自分を笑った。

しかし翌日、全く期待していなかった晴天無風の真っ昼間に突然アタリがきた。取り込むと21kgのカガミゴイだった。これがモンスターパラダイスと呼ばれるこの湖の魅力である。アタリは少ない

見渡す限り、美しい水と風景が広がる湖、マディーヌ湖



ものの、魚の平均重量ならほかの釣り場に負けないだろう。

ステファンの話では、彼が釣りをしていた桟橋の近くに、バイクとバスをねらう釣り人が来たらしい。彼は釣りにならないと判断して移動してきたのだ。魚食性の魚を釣る人が集まる場所は釣れないという。どうなのだろうか。

聞けば、バイクやバスはけっこう釣れるようだ。ボート1艘あたりバスを100尾、バイクを2~3尾は釣っていくらしい。釣り人が多いのも納得できる。

そのうちに私の釣り場周辺でもバイクねらいの釣り人がボートでやってきて、ステファンのサオが引っかけられてしまった。彼がいやがって移動してきたのも理解できる。これでは釣りにならない。釣り人同士の間隔を、少なくとも200mとるのがよいと思う。

それはそうと、ステファンは悪いときに来たものだ。日差しは再び強くなり、暑いうえに湖はベタナギだった。

季節はだいぶ進んでいたけれど、依然としてコイの食い気はいまひとつという状況だった。

粘ってみたものの、その後は全く反応のないまま、3度目のマディーヌとお別れの日がやってきた。

スパイダー・アイランドの秋

最終章



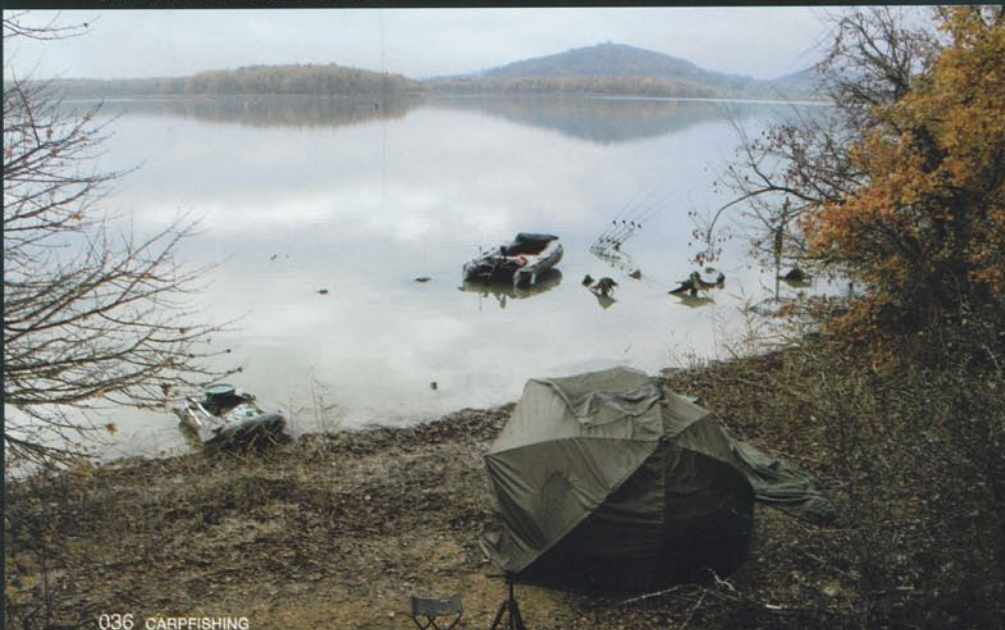
秋の日差しを浴びて輝く21kgのカガミゴイ。3度目の釣行で、無風の真っ昼間に食べた

Trip-4 マディーヌ最終ラウンド

この秋マディーヌ湖を訪れるのもこれで最後だ。ディラン・ポルトと4日間の釣り日程を組んだ。さすがに11月末の湖畔は寒く、静かだった。水温は8.5℃。お世辞にもよい状況とはいえなかった。

スパイダーアイランドは、もう我々の目の前に迫っていた。

季節はまぎれもなく秋に変わりつつあった



ディランは以前、私が2度目にこの湖を訪れたとき、遊びに来ている。といっても彼がサオをだすのは今回が初めてだった。

正直なところ、私は釣れる予感が全然しなかったが、とにかく挑戦したかったのだ。

3度にわたるこの秋の釣り旅行は、季節はずれの暑さに悩まされた。だが、さすがに今回は違う。外で眠るのか、暖かいテントの中ですごすのか、今夜の気温しだい決めることになるだろう。

バスとバイクねらいの人たちは湖全体に散り、

相変わらずそこら中を動き回っていた。湖はとても穏やかでリラックスした空気に包まれ、私も日常のストレスを忘れていた。

私たちは、甘い香りとスパイシーな香りの混じったボイリーを選んだ。水温の影響を受けないタイプのエサだ。

私は、ポイントにボイリーをほんの少しだけ投入した。

3日目の午後、一発目のアタリがあった。アラームは短く一度だけ音を発した。サオが引き込まれるのを待ったが、結局それきりだった。

私はボートを漕ぎ、ポイント上に到着すると一応合わせてみたが空振りに終わった。魚は掛かっていなかった。仕掛けがけっこう移動していたから、コイだったに違いない。

私はディランからNo.3のハリをもらって、そのハリに変更した。ハリ先がちょっと内側に向いているのが気に入ったのだ。

足もとを見ると、砕いた石が5個転がっている。オモリとして加工したものだろうか。ワイヤを通してあった。誰かが忘れていったのだろう。このカカリの多い場所で捨てオモリとして使うのにぴったりだ。私はさっそくオモリをそれに付け替えて投入した。

暑き秋の熱き最終日

釣れる気がしない。悪い予感は当たるものなの

か。あっという間に3日が過ぎ、気がつくとも最終日も時間切れ間際となっていた。

悔しさをかみしめながら、私たちはすでに荷物をまとめ始めていた。

私は4本だしたサオのうち、すでに2本を上げてしまった。

ディランは3本のサオすべてを仕舞おうとしていた。ブリームハンターの異名を持つ彼のサオには、1尾のブリーム(コイ科の魚)がぶら下がっていた。

私はテントを分解し、タックルと一緒にボートに積み込んだ。

最後に、残る2本のサオも上げようとした、まさにそのとき、左のサオが跳ねたのだった。ディランからもらったハリを結んだ仕掛けだ。

さすがに私も一瞬、目を疑った。本当に驚きだった。最後までアタリを期待し続けるのが釣り人だというのが、皆さんがその場にいたとしても信じられなかったはずだ。

ハリ掛かりしたコイは力強く抵抗し始めた。すぐさまリールをオープンにしてボートに飛び乗った。

うまい具合に小石の捨てオモリがはずれたら、そこから勝負だ。

コイまでの距離は約300m。「まずは放出したミチイトを巻き取れ」。ボートを慎重に進めながら自分に言い聞かせる。

ガクンガクンとボンピングして走ったコイが止まった。よし今度はこっちが反撃に出る番だ。



カカリの多いこの湖で大活躍した、小石オモリ



島では朝になると羊の群れが私たちを起こしにやってくる



スパイダーアイランドはまるで石器時代のようだ。6500年前のカタツムリの化石に出会える

自然のマジックとしかいいようのない風景だ



スパイダー・ アイランドの秋

最終章



Profile マックス・ノラート Max Nollert

ドイツ在住。
ボイリーをはじめとする総合釣り具メーカー、インベリアルフィッシング代表。ワールド・カーブ・カップの大会プロデューサーを務める。ドイツを代表する巨ゴイハンターとしても知られる。

暑かった秋の釣り旅行。その最終章を締めくくったのはこの25.5kgだった

想像できないくらい激しい闘いのさなか、魚が初めて浮き上がったとき、私はその全身を見た。鼓動が一気に激しくなる。

私は自分を落ち着かせながら、リールの回転にブレーキをかけたりゆるめたりを20回以上、数分間にわたって繰り返した。

魚はボート下のかなり深い所にいた。しかも魚と私の角度が悪い。このままでは自分のペースでやり取りできない。一度自分が動いて離れたほうが魚をコントロールしやすいだろう。

エレキモーターを使ってボートを移動させると、ようやくやり取りに理想的な角度を確保できた。これでサオにしっかり力を伝えられるはずだ。

魚は幾度か逃亡を試みた後、ついに水面に顔を出した。私はここが勝負と判断して引き寄せにかかる。タモの先数mまで魚を寄せたとき、もう大丈夫だと確信した。

魚がゆっくりとタモに滑り込む。

「イエーツやったぞ」

私は拳を突き上げた。

時間が経つにつれ、あきらめの気持ちが強くなっていただけに、この予想もしなかったすばらしい結末を、なんと表現したらいいのか。

釣りの神様に感謝するだけだ。それから、短い時間だったけれど私の友だちになってくれた魚にも。

私の手を離れ、去って行く魚を見ながら、このまま湖に残りたいという思いが私の心に湧き上がる。

魚が食ったのは11月末の午後12時30分だった。秋の湖を舞台にした逆転劇は、私がサオを仕舞う直前、2~3分の出来事だった。

誰がこの結末を予想しただろう。私のコイ釣り人生において、最も驚異的で輝かしい経験だったと思う。どんなに脚本の優れたドラマであっても、こうはいかないだろう。

レネ、トーマス、スティーブン、ディラン、最後に魚。4回に及ぶ秋の釣り旅行につき合ってくれたみんなにありがとうと言いたい。

最終日に釣れた1尾の魚だけでなく、すべてが私にとってすばらしい時間だった。

私たちが棧橋に戻ると、バスとバイクねらいの人たちがまだ釣り歩いていた。

私は湖岸に立って、澄んだ空気、神秘的な静けさ、そして満足感を心ゆくまで味わっていた。

隣ではディランが、ガラスのように輝く広大な湖面を名残惜しそうに見つめている。

私が釣り上げたコイは、彼がこれまでに見たこともない大きさだったに違いない。しかしこのとき彼は、自分を待ち受ける運命を知るはずもなかった。

彼は数ヶ月後、4800ヘクタールの巨大な湖から34.8kgの贈り物を授かるのだから、人生は分らないものだ。

秋のシーズンは大成功で終わった。ディラン・ホルト(右)は、この5ヵ月後、すごい記録を打ち立てる

